京機会関西支部第９回京都あそ歩　　2025 年 11 月 8 日（土）

=== 嵯峨野を開拓した秦氏の史跡であそ歩 ===

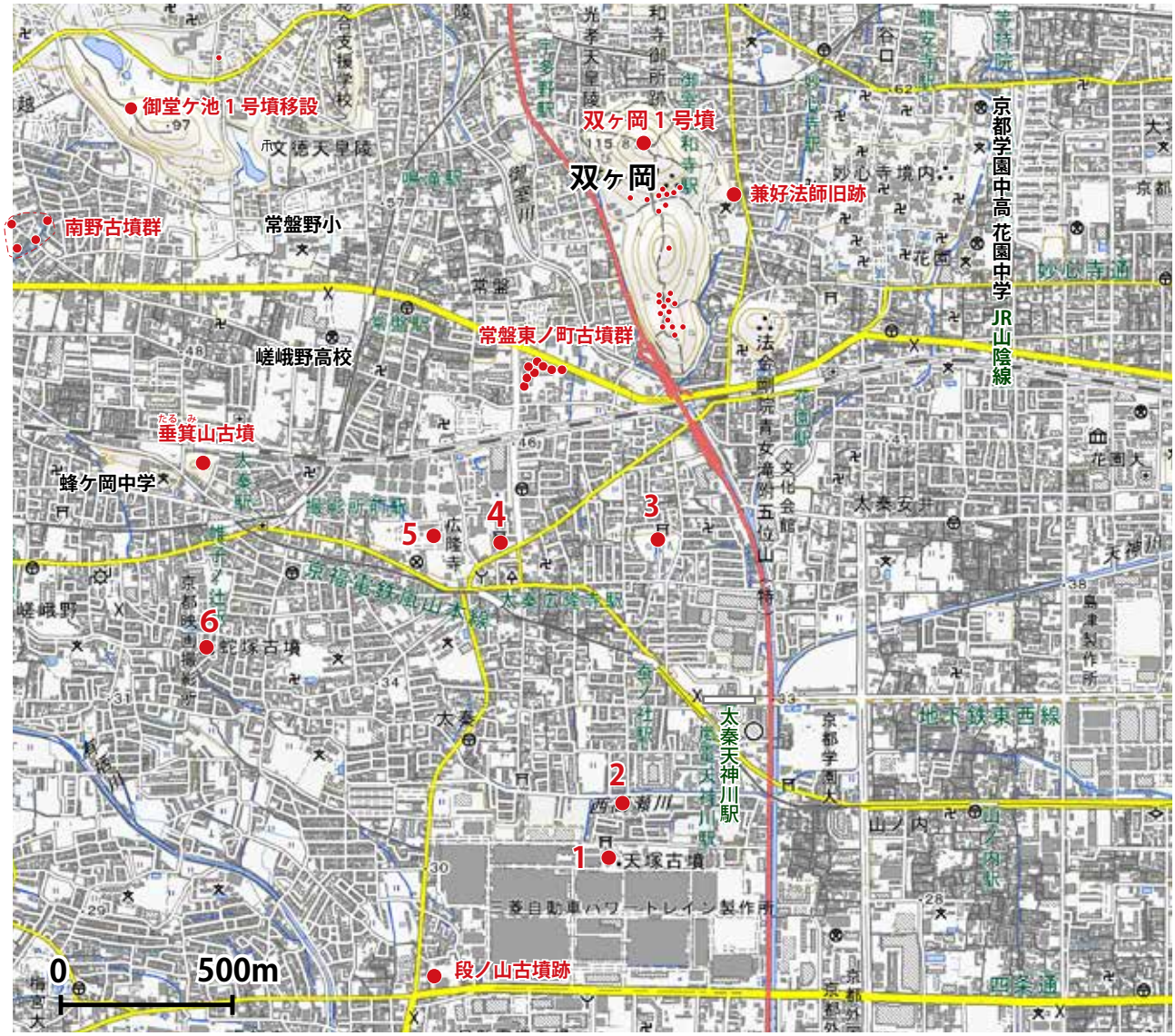
コース：地下鉄天神川駅→１天塚古墳→２清水山古墳→３木嶋神社→４大酒神社→５広隆寺→６蛇塚古墳→嵐電帷子ノ辻駅→嵐電嵐山駅→レストラン京翠嵐翠嵐（ラグジュアリーコレクションホテル 京都）　嵐山で解散

嵯峨野

嵯峨野は京都盆地の西北隅に位置する。北と西を遍照寺山から嵐山に連なる山なみに囲まれ、南に大堰川、東に双ケ丘がある。東西 4km 南北 12km ばかりのこの狭い地域は、古来､景勝の地として知られてきた。大堰川、広沢池、大沢池といった川や池、山すそに広がる竹薮、平地の田園、大覚寺や天竜寺などの名刹をはじめどする寺社がある。観光都市京都のうちでも東山地区と並んで風景の美しい地である。

この嵯峨野の地は、京都市の中でも古墳が集中している事でも有名である。大陸から渡来した帰化人の秦氏が、近江・丹波への交通の要所である葛野郡に居住し、大陸の土木技術で後世にいう「葛野大堰」を作って開発をすすめ、養蚕業をおこす等、古くから秦氏にゆかりのある土地である。

広隆寺付近の大型古墳を秦氏一族の中の主系とするならば、嵯峨野北辺の丘陵地に群集する小型円墳は、その傍系クラスの人開が築いたのではないだろうか。



嵯峨野と秦氏

秦氏は応神天皇に時代に帰化した弓月君の後裔で秦始皇帝の末を自称しているが、新羅から渡来したという説が有力。

秦氏は養蚕や織物のほか水利工事技術にも優れ、５世紀終わりから６世紀に嵐山渡月橋に葛野大堰を造営して灌漑用水を確保し、葛野郡（現西京区嵯峨野周辺）を開拓し、あわせて丹波からの物資集積地の役割を担い財力を蓄えた。

秦河勝は、蘇我・物部の戦い際、蘇我側についた聖徳太子の軍政として軍を率い、聖徳太子が戦勝祈願の仏像を作るための白膠木（ウルシ科の広葉樹）の木を用意したという。榎の木から矢を射る物部守屋を迹見赤檮が射落とし、秦河勝が首を斬ったという。河勝は冠位十二階の大仁（第３位）に叙された。

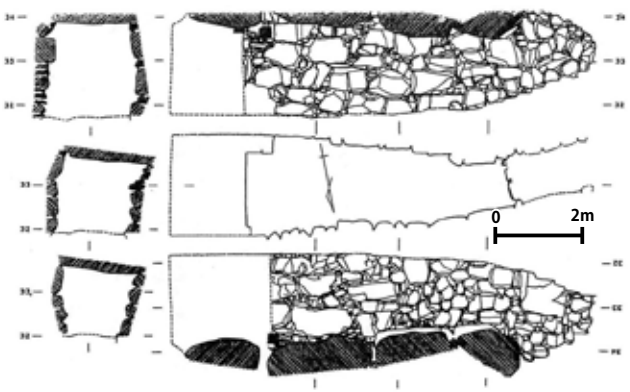
河勝は聖徳太子が戦勝祈願で製作した仏像をおさめるため四天王寺の建立を支援し、施薬院（薬局）、療病院（病院）、悲田院（病者や身寄りのない老人などのための社会福祉施設）の設置に関わったという。

嵯峨野の遺跡

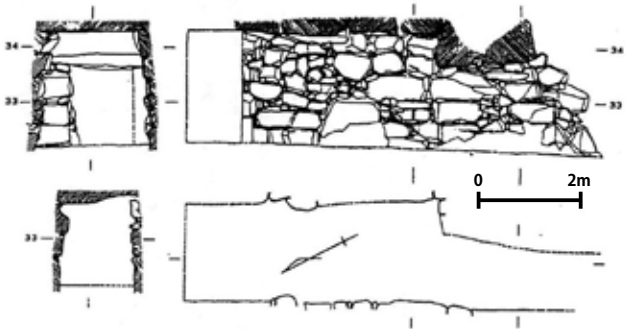
嵯峨野北方の丘陵地帯には、旧石器時代から縄文時代早期にあたる石器を出土する沢ノ池遺跡（鳴滝三本松沢ノ池南岸）、菖蒲谷池遺跡（大沢池北北西 1km 菖蒲谷池公園）、広沢池遺跡等があり、梅ケ畑遺跡では弥生時代中期初頭の高さ 20 ～ 30cm 程の外縁付鈕式の銅鐸４点が出土している。しかし古墳時代前期までの遺跡は殆んど知られていない。

古墳時代後期の６世紀代になると遺跡の数が急増する。古墳群は立地条件や群の構造から２つに分けられる。

一群は広沢池を中心とする古墳群で、丘陵部に点在する円山古墳 (大覚寺１号墳)、甲塚古墳、広沢古墳群などの径 30 ～ 50 m級の規模の大きな円墳と、これらの背後山地にある約 100 基の群集墳で構成される。



天塚古墳石室　後円部



天塚古墳石室　くびれ部

天塚古墳後円部石室

天塚古墳くびれ部石室

他の一群は、太秦広隆寺の付近にある一連の大型の前方後円墳を中心とする。この古墳群には蛇塚古墳、清水山古墳、天塚古墳、仲野親王陵古墳等が含まれる。

この古墳群に群集墳が含まれないと考えられていたが、常盤東ノ町古墳群のように地上部は既に削られていたが、石室が発見された。このように大型の前方後円墳を含み、その中には 6 世紀前半にさかのぼって造営された古墳もあるこの古墳群が、嵯峨野における中心的古墳群であったといえよう。

1. 天塚古墳

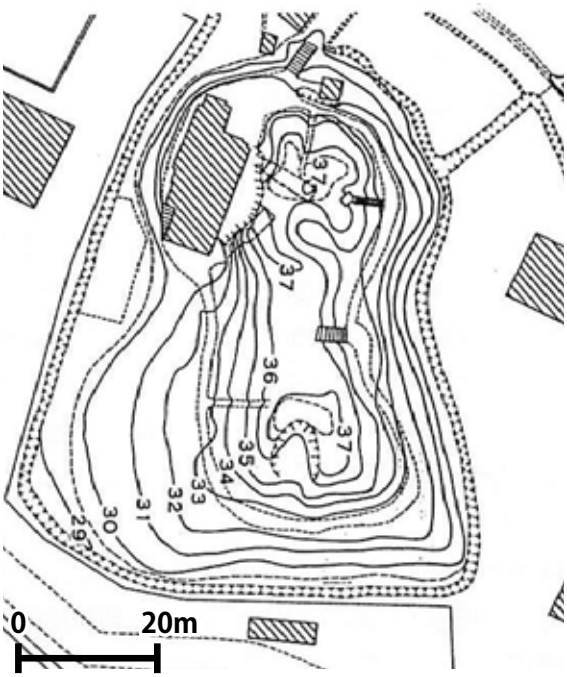
天塚古墳は平地に築成された前方後円墳で、ほぼ南面している。全長は 73 m、墳丘は 2 段築成である。前方部の幅は後円部の径より大きく、高さも前方部がやや高い。後円部の西側には西北方向に開口する無袖式石室が、くびれ部には南西方向に開口する片袖式石室がある。2 つの石室は後円部中央に向ってほぼ直角をなす。後円部にある無袖式石室は、全長 8.1 m、玄室内の幅は 2.2 mある。

玄室の長さ 4.7 m、幅 1.8 mである。この石室は明治 20 年に発掘された。出土遺物は、須恵器、銅鏡、連珠金銅製品、小玉、小札、鉄鏃、刀片、鉄剣破片、馬具等である。

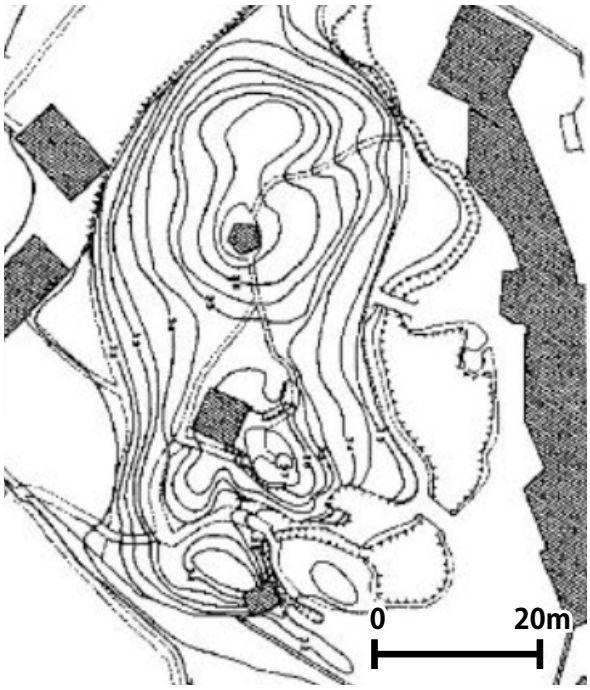
古墳の形、石室の構造、出土進物等から、この古墳は 6 世紀前半頃に築造されたものと推定される。このように、墳丘・内部構造・出土遺物がそろって知られる前方後円墳は嵯峨野では珍しく、貴重な存在である。

2. 清水山古墳

天塚古墳に隣接して、清水山古墳という全長約 60 mの前方後円墳があったが、削平されてしまった。墳丘はほぼ南面し、前方部が後円部を凌駕している、後期型の古墳であったと伝えられている。



天塚古墳墳丘図



清水山古墳墳丘図

3. 木嶋(このしま)神社

養蚕で財を為したといわれる秦氏が関係したというイメージが強いが、それは本殿の脇にある蚕の社の存在があるからだと思われる。ただし、本体の木島神社自体も広隆寺との関係があるようなので、無関係ではないであろう。

なお、境内地は、太秦地域で唯一実態が判明している弥生時代後期～古墳時代中期の遺跡であるが、秦氏が入植してきた時期には廃絶している。古墳時代中期には韓式系土器などが出土しているので、太秦地域では、秦氏が入ってくる前から渡来系集団が活動していたようである。

境内地東北隅の調査では、湧水施設が確認されている。まだ確定したわけではないが、境内地西部にある特殊な三角鳥居を擁する湧水祭祀施設とともに、古墳時代の湧水祭祀施設として著名な城之越遺跡例のような構造の祭祀施設になる可能性があり、太秦地域でもヤマト王権中枢部のように、渡来系要素を活用し、水のまつりを行っていたような集落経営が考えられる。そのような場所を選んで、秦氏が入り込んできたかもしれない。

各地の三角鳥居は、木島神社を模倣したものが多く、水の祭りや織物（東京三囲神社は呉服屋三井邸から移築）にかかわる。

祭神は

天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)：天地開闢時に現れた造化神。高御魂神、神魂命神と合わせ造化三神という。

大国魂神(おおくにたまのかみ)：天照大神と対となる男の神。大和神社祭神。素戔嗚命の子で饒速日命ともいわれる。神武東征に抵抗した大和の豪族長髄彦が奉じた。物部氏の祖。

穂々出見命(ほほでみのみこと)：瓊々杵尊の子。山幸彦。神武の祖父。

鵜茅葺不合命(うがやふきあえずのみこと)：穂々出見命の子で神武の父。

瓊々杵尊(ににぎのみこと)：天照大神の孫。

木嶋神社拝殿

木嶋神社本殿と蚕の社

湧水祭祀施設　三角鳥居

古墳時代の水の祭り（導水施設）

奈良県桜井市纒向遺跡　湧水祭祀施設（３世紀末）

三重県伊賀市城ノ越遺跡　湧水祭祀施設（4 ～ 5 世紀）

奈良県御所市南郷大東遺跡　水の祭り再現図

南郷大東遺跡　湧水祭祀施設（５～６世紀）

飛鳥時代の湧水祭祀施設

奈良県明日香村酒船石遺跡（斉明朝 655 ～ 661）

飛鳥京（天武朝 673 ～ 686）

江戸時代の木嶋神社（都名所図会 1780 年）
三角鳥居に水が流れている

木嶋大路

平安京は風水に適う場所と言われている。風水に適う場所とは、北に山（玄武：亀)、東に川（青竜)、南に池（朱雀)、西に道（白虎）がある四神に守られた地であり、玄武は船岡山、青竜は鴨川、朱雀は南方の湧水池と見られるが、西の山陰道は都から離れすぎている。

平安京は、幅 10 里 (5.4km）に人工河川を配置しており、鴨川、東堀川、西堀川（埋め立てられた）が、5880 尺（1.75km) 間隔で並んでおり、西堀川の 1.75km 西にもう一本人工河川が想定される。

図 1 は昭和 56 年の京都市都市計画図であるが、D―B の間に幅 50m（古代大道の幅は 42 m）の段差が確認できる。この幅が西の道の痕跡で道に沿って御室川が流れていたと推定でき、西の道の北端に木島神社がある。

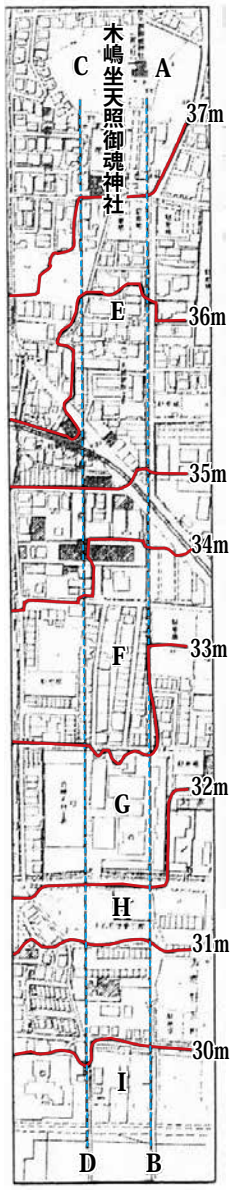
また、鴨川の北端、賀茂川と高野川の合流地点に下賀茂神社の摂社河合神社がある。河合神社と木嶋神社は、それぞれ鴨川と御室川を祀る位置にあり、社格が同時に上がるなど関連性がみられる。河合神社は糺の森にあり、糺の森には高野川から水を引いた清流、宮川と瀬見川が流れる。

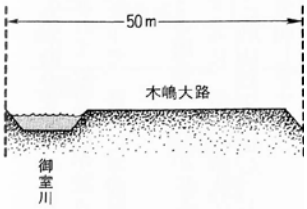
木島神社の「社叢（しゃそう）（鎮守の森)」は元糺の森と呼ばれている。御室川から水を引いた清流が三角鳥居に清流が流れ、平安時代後も水の祭祀を続けていたのではないか。

『地図から読む歴史』
足利健亮

糺の森

糺の森を流れる瀬見川


木嶋坐天照御魂神社
C
A
37m
E
36m
35m
34m
F
33m
G
32m
H
31m
30m
I
D
B


50m
木嶋大路
御室川

玄武
船岡山
玄武神社
下賀茂神社
鴨河合神社
御室川
雙ヶ岡
10里 18000尺 5.4 km
383m
一条・北京極
大内裏
大極殿
木嶋神社
(蚕の社)
1.75km
5880尺
5880尺
1.75km
5880尺
鴨川
青竜
白虎
木嶋大路消滅
西京極
西堀川埋立
朱雀大路
東堀川
東京極
383m
15080尺 4.5 km
383m
西寺
東寺
九条・南京極
羅城門
北陸道
山陰道
大縄手
東山道
東海道
鳥羽作り道
久我畷
山陽道・南海道
0
2000m
小字
横大路朱雀
朱雀

平安京計画図

4. 大避（大酒）神社

社名は酒にまつわるとか、大きく避けるとか、大きく割くという説がある。かつては広隆寺の桂宮院 (本堂は国宝) のなかにあり、鎮守の役割を果たしていたが、神仏分離令により明治時代以降に広隆寺の外へ遷された。

祭神は秦氏の始祖、秦始皇帝、弓月王、秦酒公

京都市登録無形民俗文化財「太秦牛祭」

大避（大酒）神社及び広隆寺で 10 月に行われていた夜の祭。

（鞍馬の火祭、今宮神社やすらい祭とあわせて京都三大奇祭）

神面をつけた摩多羅神が牛に乗り、風流の行列を従えて、広隆寺の客殿の庭から寺の周辺を練り歩き、薬師堂前に設けられた祭壇を 3 周し、壇上にて摩多羅神が祭文を読み上げる。参詣者は、祭文読誦の間、野次をとばすなど､行事の進行を妨げるのが恒例であった。祭文を読み終わると、四天王とともに堂内に突入するが、昔は、厄を逃れるといって、群集があとを追って堂内に入り、その面を取り上げたという。

摩多羅神についての記述が初めて見えるのは､守覚法親王（平安末期から鎌倉初期の僧。後白河天皇の第 2 皇子）が記した『北院御室拾要集』である。それによると、空海が亡くなった後、檜尾僧都（実恵）が東寺の「西御堂」を継承した際に摩多羅神像が付属していたという｡この摩多羅神の神格については、

風流を従えた摩多羅神

大酒神社

牛に乗った摩多羅神

摩多羅神に従う風流

祭文読む摩多羅神

法親王は「奇神」であり「夜叉神」であり、「吉凶を告げる神」であると説明している。

毎月15日に供物をすると、神の慈悲によって災いが除かれ福が与えられるという。さらに、『天長御記』という書物から引用する形で、「東寺の守護天（法親王は摩多羅神のことだと考えていた）」は稲荷神の使者であり、菩提心の使者であったと述べている。

１４世紀に書かれた『渓嵐拾遺集』によると「人が死に臨んだ時、摩多羅神がその人の肝を食らうことにより極楽往生できる」という。

兼好法師庵跡　長泉寺境内には兼好の墓。双ヶ丘西麓から江戸時代にこの地に移されたと伝えられる。

兼好法師庵跡

徒然草の作者兼好法師は、鎌倉末期金沢流北条家（横浜市六浦付近が本拠地）につかえ鎌倉幕府滅亡後、木嶋神社の北側、双ヶ岡麓に庵をむすび隠棲したという。吉田兼好という名で知られるが、これは、100年ほど後の室町時代半ば、吉田神社（京都大学東側吉田山の麓）の神職で唯一神道を創設した卜部（吉田）兼倶が、すでに有名だった兼好を自分の系譜に組み込んだという。兼好は京都北野社（北野天満宮）の神職卜部氏の一族で吉田姓を名乗ったことはないという。

唯一神道：様々な神道を統合した虚無太元尊神（そらなきおおもとみことかみ）を祀る大元宮を吉田神社内に作った。賀茂川に塩俵を沈め、賀茂川の水が塩辛くなったのは天照大神が伊勢神宮から海から賀茂川を上って吉田神社へ来たからだと主張した。後にウソがばれた。

北野社：室町時代、京都には300以上の酒蔵が存在したが、酒蔵はまだ麹造りを行っておらず、麹の製造から販売までを担う麹屋が別個に存在していた。北野天満宮は、「麹座」と呼ばれる麹屋の組合を結成し、幕府が認めた独占権を持っており、豊かな財源となっていた。

【補足：鴨長明】

「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし」方丈記

『徒然草』兼好法師、『枕草子』清少納言とならぶ古典日本三大随筆のひとつ方丈記の作者鴨長明は、平安時代末期から鎌倉時代の歌人。

賀茂御祖神社（下鴨神社）の禰宜の家系に生まれる。河合神社（ただすのやしろ）の禰宜の職を望むが叶わず、神職としての出世の道を閉ざされ、日野（現・京都市伏見区醍醐）で隠遁生活を行った。

河合神社に復元された鴨長明の庵

5. 太秦広隆寺

秦氏や聖徳太子との関わりが知られる寺で、秦寺・大秦公寺・秦公寺・太秦寺・蜂岡寺・葛野寺などともいう。ここの旧境内で7世紀前半の瓦類が出土し、その時期に瓦葺きの建物が存在したことがうかがわれる。これを、『日本書紀』推古天皇31年（623）7月条に、新羅・任那の使者が献じた仏像を葛野の秦寺に安置したという記事があり、この葛野の秦寺に当たるのではないかと考えられている。

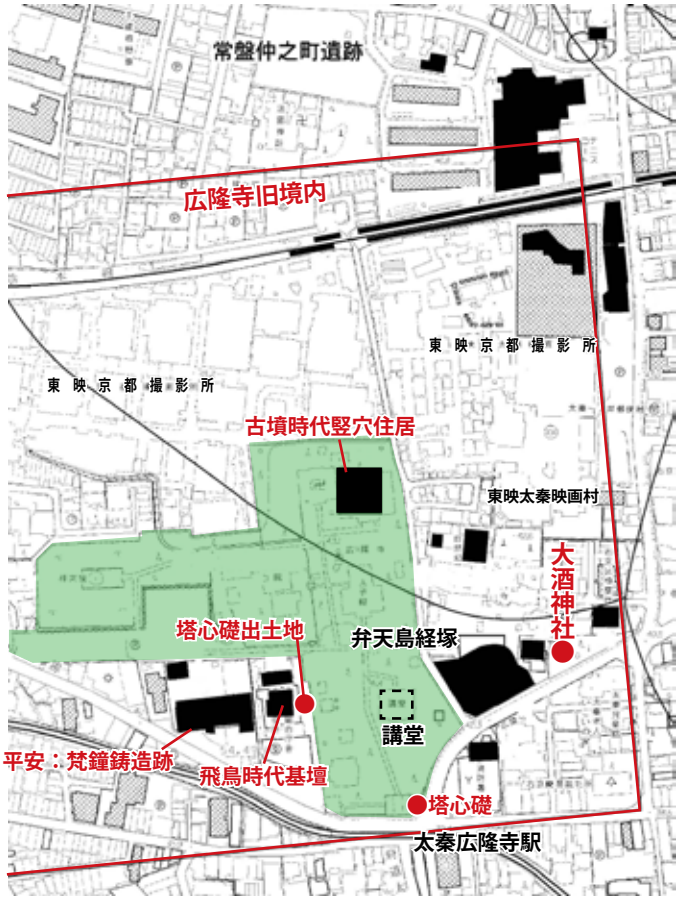
『日本書紀』推古天皇11年11月条にみえる、秦河勝が建立した秦氏の氏寺、蜂岡寺にあたるとされる寺は、北野廃寺（北野白梅町交差点北東角）と考えられ、時期は不明であるが、おそらく平安京遷都にともなって、現在の太秦の地にあった寺へ移転・合併されたとする見方と、それを否定する両方の説がある。

承和5（838）の『広隆寺縁起』によれば、もともと葛野郡九条河原里・同荒見社里にあったが、土地が狭いために五条荒蒔里に移したとされるが、その時期は不明である。

移転後つまり平安時代には条里の六坪分（東西約300m、南北約200m）を占めていたことがわかる。現在では、それよりも狭い面積に限られている。

太秦広隆寺は、京都の現存の寺院の殆んどが平安京遷都（794年）以後創建された寺院であるのに対し、その創建を飛鳥時代にまでさかのぼらせ得る現存最古の寺院である。しかも現存の建造物のうちで、京都市内で最も古く、かつ唯一の平安時代の建物である**講堂**がある。平安時代の建物は度重なる戦火で焼失している。

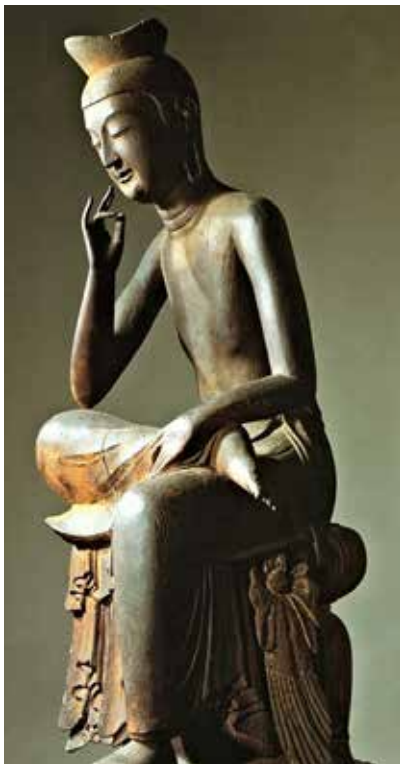
寺地は南面していて、江戸時代再建の**楼門**が立つ。その門前に、かつて金堂・（現在の講堂）の西南約45m地点（薬師堂の西側）から出土した**塔心礎**を台石とする石標が立っている。楼門を入って正面にあるのが平安時代の建造物である。位置からみて、金堂であり、発掘調査によって、この金堂にとりつく



回廊の跡が検出された。

弥勒菩薩半跏思惟像

霊宝殿には、諸像が安置されているが、特に国宝の弥勒菩薩半跏思惟像は有名である。右手を頬に軽く当て、思索のポーズを示す弥勒像である。像表面は、現状ではほとんど素地を現すが、元来は金箔でおおわれていたことが、下腹部等にわずかに残る痕跡から明らかである。右手の人差し指と小指、両足先などは後補で、面部にも補修の手が入っている。昭和35年(1960)



弥勒菩薩半跏思惟像（国宝）

京大生が、弥勒菩薩の美しさに思わず頬ずり？をして、薬指を折ってしまったという事件が有名。

制作時期は 7 世紀とされるが、制作地については作風等から朝鮮半島からの渡来像であるとする説、日本で制作されたとする説、朝鮮半島から渡来した霊木を日本で彫刻したとする説がある。

像高は 84.2㎝で、台座とともに赤松の一材から彫られたものである。飛鳥時代の他の木彫像がすべて楠材で造られているため特異であり、朝鮮半島からの渡来像であるとする説の根拠となってきた。ところが、1968 年内刳りの背板はクスノキに似た広葉樹が使用されていることが判明し、造像当初のものとみられるため、アカマツが日本でも自生することから本像は日本で制作されたとも考えられる。

『日本書紀』に記される、推古天皇 11 年（603）、聖徳太子から譲り受けた仏像、または推古天皇 31 年（623）新羅から請来された仏像のどちらかがこの像に当たるのではないかと言われている。

講堂　京都市内唯一の平安時代の建物（重文）

山門　前に京福電鉄路面電車が走る

山門脇の塔の礎石

秦河勝夫妻の像

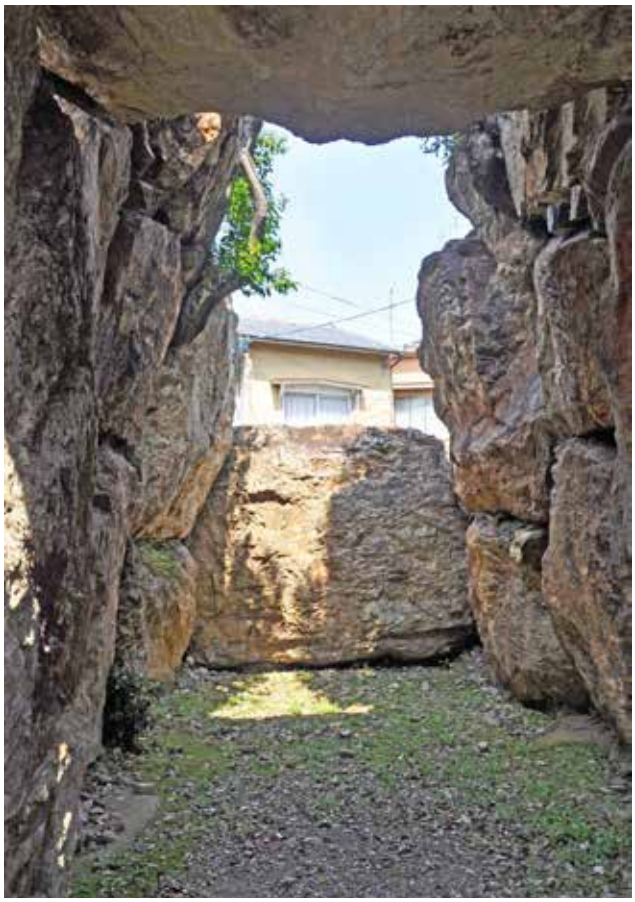
江戸時代の広隆寺（都名所図会 1780 年）

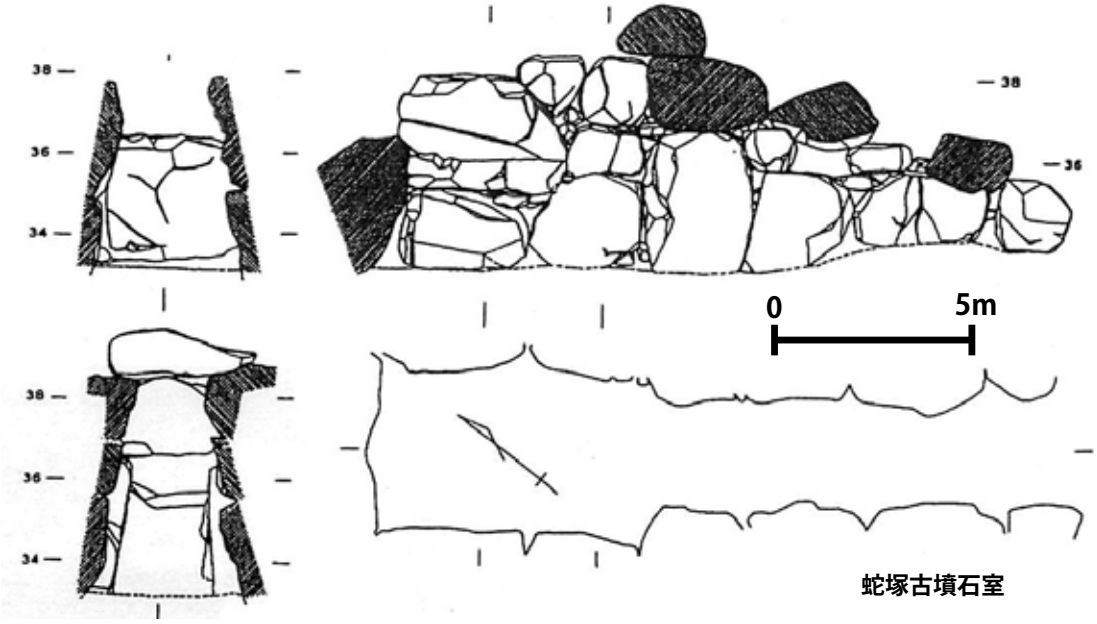
6. 蛇塚古墳

京都府下最大の石室をもつ。現在住宅地の中にあって、封土を失い石室が露出して残っている。もとは全長 75 m、前方部幅 30 m、後円部径 45 mの前方後円墳であったと伝えられる。現存する東南に開口している全長 17.8 mの両袖式横穴式石室は全国的にみても大規模なものである。玄室の幅は 3.8m で奈良県の見瀬丸山古墳に次ぐ大きさである。玄室の長さは 6.8 mである。玄室の床面積でみると、三重県高倉山古墳、岡山県こうもり塚古墳、奈良県石舞台古墳に次いで全国第 4 位である。石室の石組は近辺の古墳の石室には見られない大きな石を用いている。玄室部天井石は一枚しか残っておらず、羨道部に 12 枚の天井石が残っているが、開口部に近い石は旧状をとどめていない。石室内から家形石棺が出たと伝えられるが、その詳細は明らかでなく、伴出遺物も不明である。石室の構造から 6 世紀末に造営されたものと推定される。

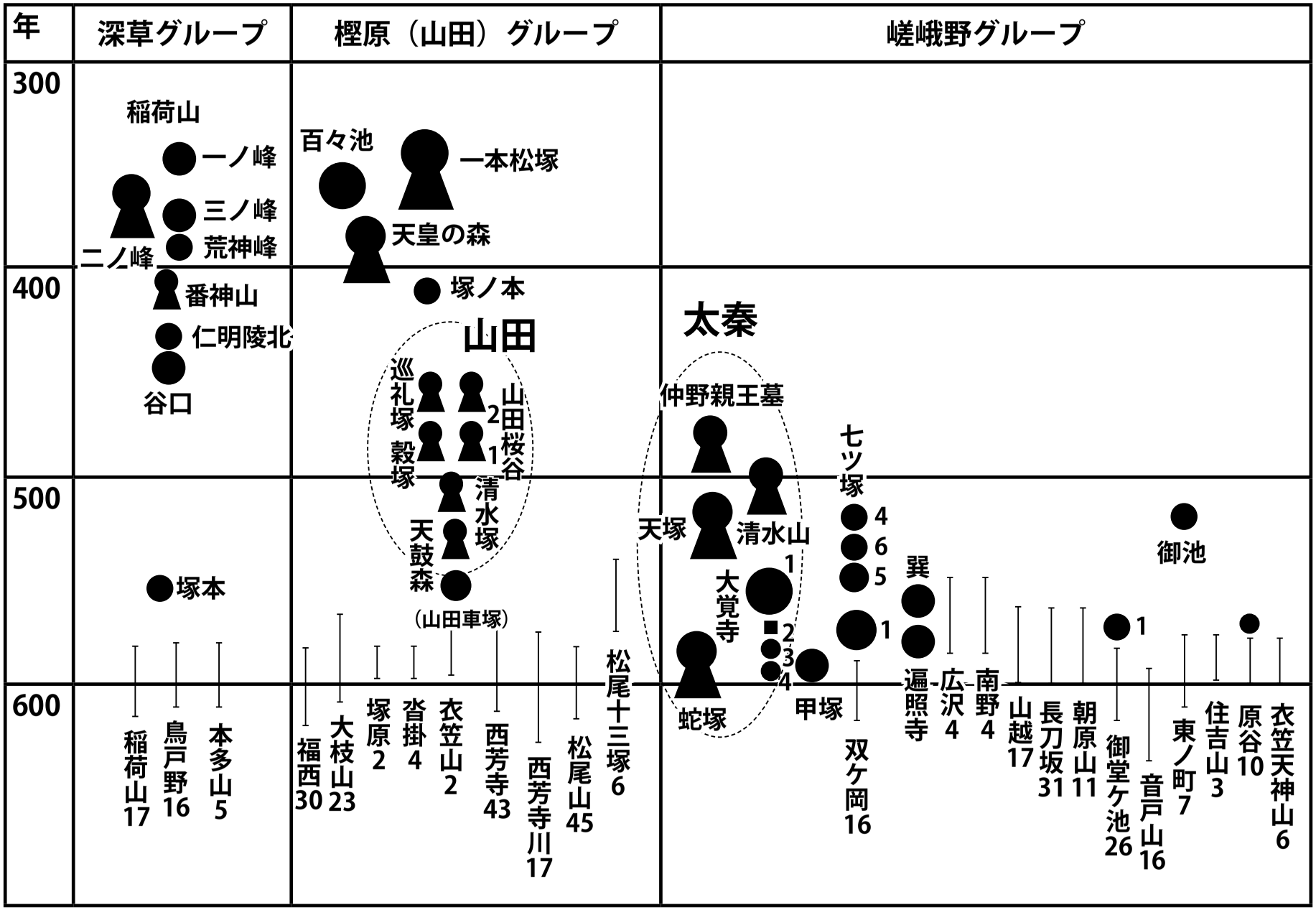
太秦地域を代表する古墳であり、被葬者は聖徳太子とも交流のあった秦河勝を想定する研究者が多いが、研究者間で年代に齟齬があり、判断材料が少ないこともあって決着がついていない。

蛇塚古墳墳丘

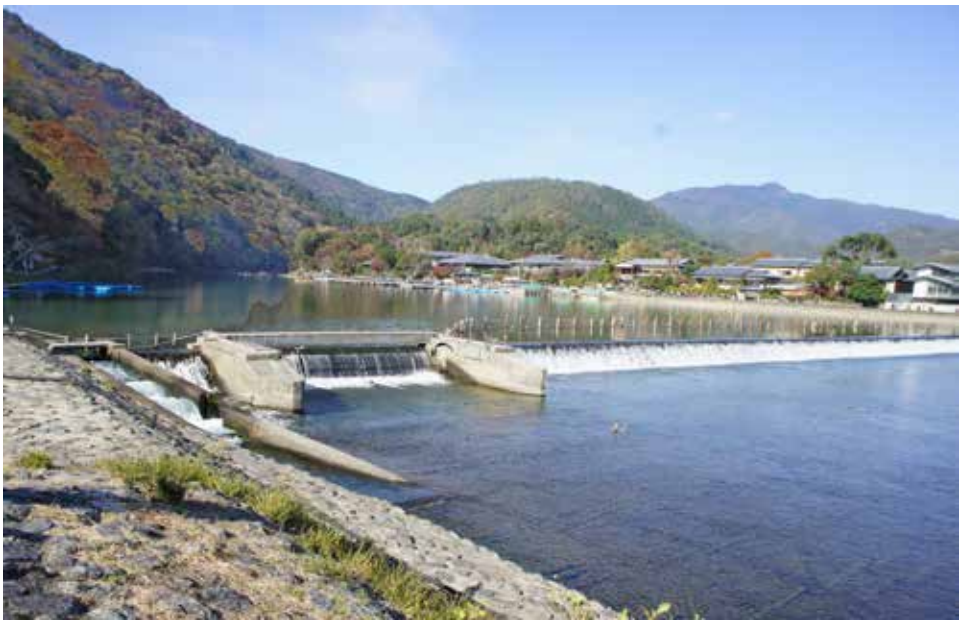




蛇塚古墳石室



桂川流域古墳編年表（丸川 2005 に加筆編集）



秦氏が開拓した葛野大堰跡　一の堰（渡月橋付近）